

---

# ポケットの中の幸せ

翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットの中の幸せ

### 【Zコード】

Z4586A

### 【作者名】

翠

### 【あらすじ】

何気ない日々を幸せに思える時。それは隼人のおかげ。「幸せ」心からそう思う。

(前書き)

ふとポケットに手を入れてみた時に思いついたものです。  
ポケットの中つて意外とあつたかいんですね・・・

このところ雨が続いている。

髪が跳ねて困る。

手鏡を見てふてくされる私。

「奈美！」

振り向くと隼人が部活を終えて階段を駆け上がりってきたところだつた。

「「」めん。片付けしてたら遅くなつた。」  
と、息を切らして言つ。

「いいよ。別に。そんなに待つてないし。」

「そつか。なら良かつた。」

安心したように微笑む隼人が好き。

本当は結構、待っていたけど気にならなかつた。  
隼人が私の手を握つた。

「寒かつたろ？」

そう言つて隼人は私の手を優しく温めてくれた。

「ありがとう。」

俯き加減に私が言つと隼人は少し顔をあげて微笑んだ。

言わないけど、隼人は私が雨の中、早くから隼人を待つていたのを  
知つていたんだ。

隼人・・・好き

あの日、私はいつものようにサッカー部の練習を教室から友達と話しながら眺めていた。

一人、気になる人が居たから。

その人を目で追う。

「あつ、抜いた・・・」

思わず口から出でてしまった。

「何？奈美また隼人君のこと見てたの？」

加奈子がニヤニヤ笑つて言ひ。

「まあ、こここの席に座るのもサッカー部の練習見るためだしね。」

亜里抄も話を合わせる。

「うう・・・」

言葉に困る。

「まあ、好きになつてもう、一年半経つしね。」

亜里抄が続ける。

「一年半だよ？ろくに話もしないのにそこまで好きになれる事に驚きだよ。」

加奈子も続ける。

「いいじやん！好きなんだもん。」

ちょっとムキになつて言うとまたもや笑われてしまつた。

二人が勝手な方向に話を進めていくのを無視して私はまた視線を校庭に戻した。

隼人は今度はボールを器用に蹴つてパスをしているところだつた。頑張れ。声には出せないけど・・・。

こうして私はいつも放課後は隼人の姿を眺めている。

サッカー部の練習も終わり加奈子と亜里抄と帰るうとしていた時、

「おい、藤田！」

クラスの森下に呼び止められた。

「何？森下。」

「ちょっと用があるんだけどさ、ほら、今日のHRの事でさ。先生がお前に頼めつて。」

「ああ、・・・明日じゃダメ？」

「「めん。すぐ終わるからさ。頼むよ。」

「しようがないなあ。ごめん加奈子、亜里抄、先に帰つていいから。」

「待つよ。校門で待つとくし。森下あ、早く奈美返してよねえ。」

「ははっ。もちろん。」

森下は苦笑いを浮かべると「こつち」と言つて階段を上がり始めた。森下の後をついて行きながらふと、この時間帯が好きだと思った。校舎にはほとんど誰も残つていなくて、少し冷たい空気。

校舎の中の独特の匂い。窓から見える校庭。誰もいない廊下に響く足音。

なんだかその全てが好きだと思った。気付くと私のクラスの前だつた。

「じゃあな。」

「えっ！？」

それだけ言つと森下は私を教室に強引に入れてさっさと行つてしまつた。

「あの・・・藤田？」

囁くような緊張した声。

でも、しっかりと聞き取れる真っ直ぐな声。

ドキッとして振り向くとそこには隼人が立つていた。頭の思考回路は完全に止まつてしまつた。

何か言うべき？

なんて言えばいい？

それしか頭の中には浮かんでこなかつた。

鼓動が速くなつていく。

どうしようもなくて焦つて逃げようとしたら腕を掴まれてしまつた。

「待つて！」

こんなに近い・・・

隼人の手が・・・

隼人の声が・・・

頭が真っ白になつていく。

「あのさ・・・藤田。俺、お前の事好きなんだ。」

その言葉の意味が分からなかつた・・・。

あの時自分が何て言つたのか、まったく覚えてない。

でもパンクしそうな頭でもはつきり分かつたのは隼人の照れた笑顔だつた。

あれから二ヶ月たつた今、私は前よりももつと隼人を好きになった。

隼人の声。

隼人の仕草の一つ一つ。

私の手を大切そうに握る手。

いつも前を見る真つ直ぐな眼差し。

そして私に向ってくれる眩しいほどの笑顔。

好きで好きで仕方ない。

どうしようもないほど好き。

ありきたりな毎日が待ちどうしくて。

なんでもない日が大切で、ごく当たり前な日々を望んでいたりする。

その中に隼人が居るだけで私は毎日が幸せなんだ。

雨が降つても、蒸し暑い日でも、すごく幸せ。

叫びたいほど幸せ。

だから今、この瞬間に

隼人のポケットの中に私の手があることを確かめさせて。

まだ、恥ずかしくて言えないけど・・・

私はこのポケットの中が、隼人の手の中がすごく好きなんだよ。

いつか言えるようになるまでは

隼人が何気なくしてくれる今までいよう。

ふと、隼人が口を開いた。

「俺さ、奈美の手握るの好きなんだよね。」

私は雨の降る空を見上げて微笑んだ。

幸せ。



(後書き)

最後まで読んでくださり有難うござります。  
幸せなんて本当はよく分からないんですけど、  
こんな感じだと思い書きました。  
ご意見・ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4586a/>

---

ポケットの中の幸せ

2011年1月7日14時49分発行